

# 羅針盤

KANSAI GAIDAI KYOSHOKU JOURNAL

教職を目指す学生・卒業生のために

# COMPASS

第102号 2014.10.4(土) 発行

関西外国語大学  
教職教育センター

SCET+

## 教採2次試験の朗報が次々と！

本年度も教員採用試験の最終合格の結果が、香川県をきっかけに次々と嬉しい報告が教職教育センターに届き始めています。合格者の皆さん合格おめでとうございます。少子化に伴い全国的に需要の減少傾向がいよいよ現実になり受験環境は厳しさが予想されます。

このような状況にあっても、「夢は叶えられるもの」、「勉強はウソつかない」ことを信じて、苦難を乗り越え、当面の目標を達成した仲間にはエールを贈りたいと思います。これから10月末の地元大阪の合格発表まで1カ月ほど続きますが、受験者の皆さんに期待を込めてよき便りを待っています。合格者からの『合格体験記』を投稿していただいていますので後で掲載します。今後の夢の実現に向けて大いに参考にしてください。

### 【合格体験記】速報第1弾

**岡田 望夢 さん**

**奈良県 中学校 英語科 合格**

**外国語学部 英米語学科 平成26年3月 卒業**

### 「悔しさの分だけハネになる」

皆さん、こんにちは。今年の3月に中宮キャンパスを卒業した、岡田望夢と申します。自分が羅針盤を書く立場になったということにあたり、非常にうれしく思っています。

私自身の講師経験や、今年度の教員採用試験にいたるまでの経緯を述べさせていただきます。

去年の8月、私は今までに味わったことのない悔しい思いをしました。周りの友だちがぞくぞくと一次試験を突破していく中で、私はその仲間入りをすることはできません

でした。みんなと同じように筆記の勉強や面接練習をしてきたのに、どうして自分はダメだったのか。本当に悔しい思いでいっぱいでした。だからこそ、来年は絶対に受かってやる！という気持ちを持ち、今年度の教員採用試験に臨めたのだと思います。

私の周りでは、講師をする友だちのほとんどは常勤でした。しかし私はあえて非常勤を選択しました。採用試験にむけての勉強する時間の確保も理由の1つなのですが、常勤講師の仕事は、正規の教員になってからでもできると思ったからです。非常勤で自分の時間を作り、まわりの先生方とは違った自分の強みを持ちたいと考えていました。そこで私の強みになったのは、特別支援学級での授業補助のボランティア活動です。2次試験の個人面接で、「非常勤講師以外の時間は何をしているんですか？」という質問をされたのですが、私は自信を持って特別支援学級のボランティア活動について答えました。すると面接官の方々はすごく驚いた感じでうなずいてくださいました。非常勤講師を考えている方は、この質問は必ず聞かれると思うので、非常勤としての時間の使い方を自分なりに考えることをおすすめします。

このように他人との違いを作ることはとても大切なことだと思います。なぜならそれが自分の個性となり、強みにもなるからです。奈良県の2次試験にはプレゼンテーションシートというものがあります。エントリーシートのようなもので、これをもとに個人面接で質問をされます。多くの方は特技の欄に英検やTOEICの点数を書いていたのですが、私はそこまで英語ができるわけでもなく、英検も持っていなかったため、その欄には「人を笑わすことができます」と書きました。すると実際に個人面接のときに「私たちを笑わせてください」と言われたので、ギャグを2つほどやらせていただいたのですが、面接官の方々は声を出して笑っておられました。一見、ふざけているように思うかもしれませんが、自分のありのままの姿を出そうとした結果がこれです。

私は教員採用試験にいたるまで、たくさんの方々に支えられてきました。家族はもちろん、すでに卒業しているにもかかわらず、面接練習や模擬授業の指導をしてくださる先生方。去年、私と同じ悔しい思いをした同期たち。こんな卒業生を受け入れてくれた4回生のみなさん。みなさんがいてくださったからこそ、合格することができたのだと思っています。本当にありがとうございました。

今年合格されたみなさんは、これから共に頑張っていきましょう。残念ながら不合格だったみなさん、今かなり悔しい思いをしていると思います。私も去年は同じ立場であったので非常によくわかります。ですが、悔しさの分だけバネとなり、必ず力となって自分に返ってきます。努力は報われないことはありません。自分の夢に向かって突っ走ってください。

**西田 法浩 さん**

**奈良県 中学校 英語科 合格**

**外国語学部 英米語学科 平成 26 年3月 卒業**

## 「失敗を糧に」

この度、奈良県の教員採用試験に合格することができました。はじめに、たくさんのご指導をしてくださった教授、教職教育センターの皆様、優しく見守ってくれた家族、辛いときにも支えてくれた友達、自分を成長させてくれた各学校の先生方、本当にありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。また、私の話がこれから採用試験を受ける皆さんの”参考”になるとは到底思えません。少しでも”励み”になれば幸いです。

私は昨年の教員採用試験では、一次試験で落ちました。ともに戦った仲間が次々と合格していくのを聞かたび、嬉しさと悔しさが同時に心の中を駆け巡っていたのを覚えています。素直に仲間の合格を喜ぶことができませんでした。「どうして俺は…」こんなことばかり考えていました。

失敗してから思うことはいつも同じです。「もっとあのときに…」今思うと私の大学生活は失敗ばかりでした。一回生のとき、TOEFLの点数を満たすことができず、2回生からの教職課程を履修することができませんでした。3回生になってから、その分を履修しなければならなかったため、留学に行くことも断念しました。後悔することは誰しも当たり前のようにあると思います。あの頃に…。あの時に…。

教員採用試験に落ちてからは、気持ちを切り替えて、「講師で経験を積んでからでもいいか。2、3年経って合格したらいいかな。」とっていました。しかし、現実を決して甘くありませんでした。4月になっても講師登録していた自治体から連絡は来ませんでした。

4月から仕事の当てもなく、親に迷惑をかけないために派遣のアルバイトにいくつか登録しながら、採用試験に向けて勉強することにしました。「何が講師になってから2、3年後に合格やねん！講師にさえなれんやんけ！」自分がいかに甘かったかを痛感し、本当に自分が情けなくなりました。結局は自分の中にある『甘さ』が自分の最大の『弱さ』でした。『甘さ』が後悔を生み出すのです。

もう二度と同じ過ちは踏みたくない。後悔だけはしたくない。今まで以上に合格への”

欲望・気持ち”が強くなっていきました。「絶対に合格する！」。そのときは本当に『甘さ』を捨てることができたと思います。それほどに勉強していました。アルバイトとの両立はもちろん大変でした。しかし、睡眠時間を削るくらいはたわいもないことでした。

失敗は決して悪いことではありません。人を成長させてくれます。しかし、失敗してから気付いていては遅いのです。遅すぎます。教職課程を履修している人、これから教員採用試験を受ける人には私と同じ思いを、後悔をしてほしくありません。教員になる自信がない人、今何かにつまずいて悩んでいる人も私の体験記を読んで励みにしていただければと思います。今どれだけしんどくても、辛くても強い信念さえあれば乗り越えられます。もちろん、一人では教員採用試験を乗り切ることにはできません。仲間、教授、家族に頼ってください。くれぐれも甘えてはいけませんよ。最後に頼りになるのは自分だけです。どれだけやったか、その自信が全てです。教員採用試験まで時間があると思ってもその時はすぐに訪れます。今できることが何なのかを考え全力で立ち向かってください。「教師になりたい」その思いがあなたを突き動かしてくれるはずですよ。

先ほど、講師の話がなかったと述べましたが、5月からは運よく講師の話があり、常勤講師として奈良県の高等学校で働いています。採用試験の勉強はより過酷なものとなりましたが、それ以上に講師としての経験は採用試験合格への大きな足掛かりになったと思います。教師という仕事は本当に奥が深いと毎日痛感させられています。ぜひ、同じ教員として皆さんと働ける日を楽しみにしています。なって現場に来てくれることを心から願っています。

## シリーズ② 「心の窓を少し開いて！」

【学びとは、役に立つこと】

学校で働く人を一般的に「先生」とか「教員」と言いますが、教育職は、子ども一人ひとりの良さに心を寄せ、その輝きを促す使命と責任を伴う仕事です。教育活動は、毎日「人格と人格の格闘」とも言えます。

そう考えると、先生という仕事は、単に「先に生まれた者」としての「先生」や「教える者の一員」としての「教員」ではありません。

戦前は、教師のことを小学校低学年では「補導」、小学校高学年では「訓導」、中学校では「教諭」、高等教育では「教授」と呼びました。

「補導」、「訓導」は、補い教えて正しい方向に導くこと、「教諭」は、道理をよくわかるように話し聞かせ諭すこと、「教授」は、人類が到達した最高の英知を教え授けることを指します。

近頃は、何かと教育潮流の変化が激しい時代ですが、要は、子どもに大事なことを教え、深く考えさせ、より良き人間として生きていく力を育むことです。

教師は、毎日の授業を通じて子どもの内にある「良きもの」を見つけ、引き出し、深め、その子どもならではの「輝き」を発見し導くことです。

そのためには、教師が子どもの叫び声に常にアンテナを高くしておくこと。子どもの姿は教師の責任であるという自覚を持つこと。子どもの何気ないつぶやきに心寄せ、そこから普遍的な価値あるものが隠されていることを見抜くこと。ある子どもの思いを他の子どもに伝え、集団としての高まりを意識的に追究すること。一人ひとりの違いのすばらしさに気づき、違いを豊かさに変える肯定的な感性を持つことなどが大切と思われまます。人は、なぜ学ぶのでしょうか。

「学びは、人の上に立つことではなく、人の役に立つことにある」からではないでしょうか。

編集後記——教職教育センターより——

暑くなったり、寒くなったり、あっという間にこのなんとも言えない季節になりましたね。この時期にピッタリなものはないかと思回してみると、ICCの建物の東や北側には、キンモクセイが咲いていました。図書館横へと続く陸橋を上る時に、かすかにほわっと香ってきたのです。

学内中央の噴水付近には丸々と太ったバッタがいましたし、いつも見る場所のアリの数も減ってきたように感じます。(これは気のせいかもしれません。)人間ももう一枚服を羽織り始めました。

秋の夜長、みなさん寝冷えには十分気を付けてください。